

『今とりかへばや』の〈家〉への意識

——血脈上の子どもから家系上の子どもへ

伊 達 舞

一 はじめに

『いはでしのぶ』『恋路ゆかしき大将』『苔の衣』『あまのかるも』などをはじめ多くの中世王朝物語に〈家〉の問題が介在していることが明らかとなってきた。⁽¹⁾しかし『今とりかへばや』に関しては、むしろ〈家〉に対する意識の希薄さの方が問題となっている。

中世王朝物語に「家なるものがすべてにおいて優先する」時代の到来をみる神田龍身氏は、『古とりかへばや』や『有明の別れ』を親搜しの物語の枠内に位置づける。しかし男女の「とりかへ」によって大団円へと落とし込まれ密通による子の物語を持たない『今とりかへばや』は、「血とか家とかというレベルの問題へと還元し得る類のものではなく、男装・女装していた主人公達の有為転変が飽くまで目的化」している⁽²⁾と評している。また西本寮子氏も、「家をつぐ」正嫡の不在が異性装の根底にあった『有明の別れ』に対し、男女が一人ずつ生まれている『今とりかへばや』の左大臣家の「家」に対する危機感は薄いと言わざる得ない⁽³⁾とする。

しかしながら、『今とりかへばや』が〈家〉に対してまったく無関心なわけではない。稿者は以前、『今とりかへばや』が親子の〈愛

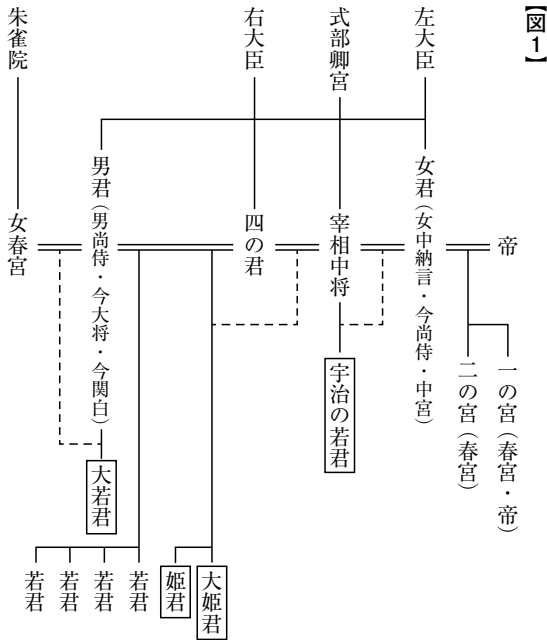
情〉をこと細かに描写している一方で、最後の大団円に至るにあたってはほとんどの親子が引き離されていることを指摘し、〈愛情〉という個々人の事情よりも〈家〉の繁栄が優先される一面を論じたことがある。⁽⁴⁾また別稿において、四の君と宰相中将との密通によって生まれた姫君が左大臣家男君の娘として入内しており、血の繋がらない子どもが后がねとして扱われている点に、血脈や実の親子関係以上に〈家〉の繁栄を優先する姿勢を読み取れるのではないかと⁽⁵⁾の視座を示した。

本稿ではその対象を密通によって生まれた子ども全体に広げて、血脈と家系という視点から『今とりかへばや』の〈家〉意識に迫りたい。なお、〈血〉と〈家〉を二元的に考えるものではないことをあらかじめ断っておく。

二 噂として広まる〈不義〉の子の血脈

王朝物語にはしばしば、正式な結婚を経ない、または結婚相手以外の相手との密通により生まれた子どもが登場する。今これを便宜上〈不義〉の子と称するが、『今とりかへばや』にはこのような子どもが四人登場する。女中納言の妻である四の君と宰相中将と

の密通により生まれた大姫君とその妹の姫君、男尚侍と女春宮の間に生まれた大姫君、そして女中納言と宰相中將との間に生まれた宇治の若君である（図一）。このうち、作中で特に触れられることのない妹の姫君を除く三人を中心に、出生の秘密がどのように扱われているか考察していきたい。



まず大姫君であるが、表向きの父親である女中納言は女性であり、当然四の君との間に子どもを授かるはずはない。従つて「とりかへ」の秘密を知る父左大臣と女中納言、また密通の当事者である四の君と宰相中将は彼女が女中納言の子ではないことを知っているが、それぞれの思惑によつて秘密は守られ、世間では女中納言と四の君との子として認識されていた。しかし、女中納言が宰相中将の子を身籠もつてしまったことでこの均衡が崩れる。男装でいられなくなつた女君は宰相中将の提案で宇治に身を隠したが、この女中納言の失踪の原因として世間では次のような噂が流れた。

【引用1】

権中納言（稿者注：宰相中将）の女君に通ひたまひけるを、有
心げにいみじくおはせし人（注：女中納言）にて倦んじて隠れ
たまひける」と世に言ひ出でて、「この生まれたまへる君
（注：大姫君）も、その子になんある」などのしるを

〔卷三三九〕

この噂は事実とやや異なるものの、四の君と宰相中将との密通、そして大姫君の出自が広く世間に露見してしまっていることになる。

次に宇治の若君だが、四の君の密通を知つた父右大臣が彼女を勸当して以来、宰相中将は宇治に隠した女君と四の君との間を行き来しながら兩方面の面倒を見ていたが、そうした彼の態度に不信を抱いた女君は、生まれた宇治の若君を残して姿を消してしまふ。その後女君は男君と互いの立場を「とりかへ」て尚侍となり、やがて帝に見初められて一の宮を生み中宮となるが、そのことを知らない宰相

中將は女君を見つけれず、世間的には母親不明とされていた。

また、男尚侍（今大将）と女春宮との間に生まれた大若君も母親不明とされている。彼は内裏で秘密裏に生まれた後、すぐに左大臣家に預けられた。この時、父の左大臣は「世にはただ、「忍びたる御あたりより出できたまへる」と言ひなしける」（巻四 四九三）と、母親については伏せている。今大将の舅である右大臣は「さりげなくていつのほどにかかる御ことどもはありけるぞと、めづらかに思しけり」（同）と奇怪に思うものの、女春宮との間に生まれた子であることには気付かない。

しかし、この二人の母親不明の子どもの出自も次第に明らかにされていく。物語の終盤、女君と宇治の若君母子の再会の場面を目撃した帝は、若君の出生の秘密を知る。その上で女君に次のように話しかけているが、ここから、世間における大若君と宇治の若君の出自に対する認識がわかる。

【引用2】

大将の大若君、この君（稿者注…宇治の若君）との母、誰とも聞こえぬこそあやしけれど、^①大将のは、女院（注…女春宮）の御あたりのことにやと世人ささめくめりし。げに、なほさなるべしとしるき人様けはひけだかく、なまめかしささばかりにこそあらんかし。^②これこそ、いかにも言ひ出づることなかれ。いさや、人は知りたためども、まろにまねぶ人のなきにや

（巻四 五一六頁）

帝は慎重に言葉を選び明言を避けているが、大若君が女春宮の子で

あることは既に噂として広まっており（傍線部①）、一方、宇治の若君の母親が誰であるかについては世間の噂になることがなかった（傍線部②）という。

三 『今とりかへばや』以前の〈不義〉の子

今まで述べたような〈不義〉の子のありようは、それまでの物語とは大きく異なる。

密通による〈不義〉の子のモチーフの先駆としては『源氏物語』の冷泉帝と薫が挙げられるが、冷泉帝の場合、光源氏と藤壺の密通は「人は思いよらぬこと」（源氏① 若紫 二三三）で、^③生まれてきた若宮（冷泉帝）が誤魔化しようがないほど源氏に似通っていても、「さらぬはかなきことをだに疵を求むる世に、いかなる名のついに漏れ出づべきにか」（源氏① 紅葉賀 三二七）という藤壺の心配をよそに、桐壺帝は「瑕なき玉」（同 三二八）と可愛がり、世間にも彼の出自が知られることはない。また実は柏木の子である薫の誕生の際も、複雑な思いを抱える源氏に反し世間では「人、はた、知らぬことなれば、かく心ことなる御腹にて、末に出でおはしたる御おぼえいみじかりなん」（源氏② 柏木 二九九）と思われており、〈不義〉の子の出生の秘密は最後まで隠匿され、世間に噂されるようなことはない。

そもそも『源氏物語』では密通自体が「過ち」「罪」と捉えられ、場合によっては源氏と朧月夜のように、それぞれの進退に関わる重大事として扱われていた。加えて女三の宮の密通に気付いた源氏が「気色に出だすべきことにもあらず」（源氏④ 若菜下 二五五）と知らぬ顔をしているように、相手の密通に気付いても表向きは取り繕

うのが良いという価値観の上にある。従って〈不義〉の子の出自も、当然秘匿すべきものとして扱われているのだ。

こうした姿勢は『狭衣物語』『浜松中納言物語』でも同様である。『狭衣物語』の狭衣と女二の宮との密事によって生まれた子どもは、即座に彼女の母親である皇太后宮の子として、父親不明のまま公表される。後にこの子が狭衣に似ていることから嵯峨院によって父親が狭衣であることが推察されているが、実は皇太后宮の実子でないことまでは疑われず、母親が女二の宮であるとは誰にも気付かれていない。

また『浜松中納言物語』でも、中納言と唐后との密通による子どもの正体は最後まで隠されている。唐后は出産にあたって蜀山に通世している父親の元に身を寄せているが、生まれた若君は「心知りの人々、わたくしに忍びたることのやうにて、さるべき人の乳あゆるなど求めて、わたくしに忍びてありけることのやうにて、隠し」〔巻一八九⁷〕養われており、父親すらその存在を知らない。やがて若君は「日本のかため」〔巻一 一一一〕であるという夢告げにより中納言が日本に連れ帰っていることで、唐において唐后と中納言の密通と子どもの存在は秘密裏に片付けられている。また日本においても、若君の出生を知らされるのは唐后の同母妹である吉野の姫君のみである。この時若君も「さるべきもののゆかり」を自然と知って叔母にあたる吉野の姫君に懐いており、こうした点に『浜松中納言物語』の親子の絆・血の繋がりのこだわりが見られる。

四 血脈に優先する〈家〉

では、〈不義〉の子の出自が露見してしまう『今とりかへばや』

では、それによって新たな物語展開が見られるかというところ、そうとも言い難い。

例えば『引用2』に挙げた女春宮と男君との噂に対して、帝は「げにさまで誰がためもかたはなるまじきほどのこと」〔巻四五一七〕と認識しており、未婚の女春宮との姦通という本来タブーであるはずの出来事が全く問題視されることなく、あつけないほど自然に受け止められている。

こうした姿勢は宇治の若君の出自にも当てはまる。女君と宇治の若君のやりとりから、帝は彼女と宰相中将との関係に気付いてしまいが、そのことによって女君への寵が揺らぐことはない。それどころか、

【引用3】

年ごろ、なほおぼつかなく誰とだに知らぬいふせさをさりげなくて思しわたりつるを、御覧じ遊ばしつるも、いとうれしかりけり

〔巻四五 一四一五〕

と、今まで気になっていたことが明らかとなり胸のつかえがとれたことを喜んでおり、この後も

【引用4】

いみじき咎、過ちありとも、うち見んばかりだに何の咎も消え失せぬべき御有様を、まして年月重なるままに梨原にのみなりゆく御心は、いかなるにつけても、いよいよ御心ざし深くのみこそなりまさらせたまふめれ、何事にかは御心劣りせさせたま

はん。

〔巻四五七〕

と、いよいよ寵愛を独占している。右の帝の態度は、最終的には朧月夜の尚侍と光源氏との過ちを赦すものの、「かの憎かりしゆゑこそ厳めしきことも出でこしか」〔源氏② 須磨 一九七〕とあるように一時は厳しい処置を取っている『源氏物語』の朱雀帝の態度とは明らかに異なっている。『今とρικάへばや』において〈不義〉の子の出自の露見は重要な意味をなしていないのである。これこそが『今とρικάへばや』の特徴であり、血脈に対する意識の表れと言えるのではないだろうか。

それが一番よくわかるのが、先に触れた宰相中将と四の君の密通によって生まれた大姫君の入内である。

【引用5】

年月も過ぎかはりて、大殿髪おろしたまふ。右の大臣、太政大臣になりたまひなどして、大將殿、左大臣になりたまひて、閑白したまふ。宮の大納言、内大臣にて大將かけたまふ。若君たちも元服したまひて、中将、少將とみな聞こゆめり。帝もおりさせたまひぬれば、春宮、位につかせたまひ、二宮、坊に居させたまふ。今の閑白殿の四の君腹の大姫君、女御に参りたまひて、藤壺にさぶらひたまふ。うち続き、この麗景殿にて生ひ出でたまひし姫君、春宮の女御になりたまふ。〔巻四五二〇頁〕

物語の終結に向けてそれぞれの昇進が記されてゆく中、先掲【図1】の大姫君は今の閑白（左大臣家の男君）の子として扱われ、中宮（左

大臣家の女君）腹の帝に女御として入内している。彼女は実際には宰相中将と四の君との間に生まれた子であり左大臣家の血脈とは全く無縁の存在である上に、そのことが既に噂として周囲に広まってしまっているにも拘わらず、ここではただ「今の閑白殿の四の君腹の大姫君」とされ、入内させられている。しかもこれはただの入内に留まらず、将来の立后をも射程に入れた配置と言って良いだろう。現時点で帝の女御はこの大姫君のみである。加えて、『今とρικάへばや』で后となるための条件とされる一の人の娘⁹⁾という点も、「今の閑白殿の四の君腹の大姫君」とされることでクリアしているのである。

西本氏は大姫君の血脈を重視して、この入内を「両親の密通の結果、生を受け、生まれながらにして背負った重荷に対する鎮魂」であり「異性装のきょうだいに翻弄される結果となった式部卿宮家の維持と繁栄に関わることで、次世代において慰撫されることになる」と論じているが、それならわざわざ「今の閑白殿の四の君腹の大姫君」とする必要があるまい。そもそも式部卿宮は物語冒頭で宰相中将の父親として名前が挙がるだけで、この二人の繋がり極めて希薄である。宰相中将自身が吉野の中の君の夫として男君の二条殿に頻繁に出入りしているような状況にあつては、この姫君の入内が「式部卿宮家の維持と繁栄に関わる」とは考えづらい。「今の閑白殿の四の君腹の大姫君」とあることを素直に受けとめるなら、大姫君は左大臣家の〈家〉の繁栄に組み込まれたと見る方が自然なのではないだろうか。女君と男君の「とρικάへ」の後、四の君は男君との間に四人の若君を儲けている。もしも血筋にこだわるのであれば、ここに姫君を誕生させ、その男君と四の君の実子を女君腹の

帝に入内させることも十分に出来たのである。あるいは、大姫君の出自を伏せることも不可能だったわけではない。本当は宰相中将の子である大姫君が男君の子とされていくのであれば、それはこれまでの物語にも見られる「血を偽る子ども」の系譜上に位置づけられる。だが『今とりかへばや』においては決して秘匿されるべきものとして扱われているわけではない。生まれた子どもの本当の血筋が噂や帝を通して明らかにされ、その上でなお本来の血筋ではなく左大臣家男君の娘、つまり后がねの姫君として、左大臣家の〈家〉の繁栄に組み込まれているのである。

今更指摘するまでもないが、『源氏物語』は血脈にこだわる物語である。源氏の〈家〉を形成するにあたっても、血脈が重視されていた。例えば光源氏の実子である夕霧や明石姫君には子どもが誕生し、婚姻により結びつきを深くしていく一方、養子である紫の上や秋好中宮には子どもは誕生せず、血脈が途絶えてしまう。玉鬘の子どもが誕生するが、彼女は髭黒の大将の妻となっており、源氏の〈家〉を担ったり支えたりする女性ではない。また、源氏の実孫である匂宮が源氏の息子・夕霧の六の君を北の方とし、且つ宇治の中の君との間に子どもが誕生しているのに対し、柏木の子である薫は源氏の血筋とは関係のない藤壺の女御腹の女二の宮を北の方としており、且つ子どもは生まれていない。『源氏物語』において源氏の血を受け継がない養子や密通によって生まれた子どもは、その本人の世では時めいて源氏の〈家〉にも繁栄をもたらずことはあっても、子どもが誕生せず、その血脈が次の代へと続いていくことはない。換言すれば、源氏の血脈にない子どもが源氏の家系に連なっていくことはないのである。

これに対して『今とりかへばや』では、本左大臣家の血を引いている宇治の若君が最後まで宰相中将の子として扱われており、左大臣家の家系上には位置づけられてはいない。宇治の若君が家系上から外れ、密通による子どもである大姫君が家系上では「今の関白の四の君腹の姫君」として扱われているのである。家系と血脈の間のねじれの上に大姫君の入内を大団円に組み込む『今とりかへばや』の〈家〉は、これまでの物語とは異なった価値観の上にあると言える。

五 むすびにかえて

以上に見てきた『今とりかへばや』の新たな〈家〉の意識は、〈不義〉の子自身のあり方にも変化をもたらしている。

桐壺帝と藤壺の子として帝位を継いだ『源氏物語』の冷泉帝は、実は光源氏こそが本当の父親だと知らされて、

【引用6】

あさましうめづらかにて、恐ろしうも悲しうも、さまざまに御心乱れたり
〔源氏② 薄雲 四五二〕

と葛藤し、源氏に帝位を譲ろうとまで考える。冷泉帝の場合、ここには別途皇統の乱れの問題もあるのだが、それはここでは措くとして、本当の父親の存在を知ったことで、自らの存在を問い直し、立場や態度を変化させようとしていることに注目したい。

また表向き光源氏と女三の宮の子とされながら実は柏木の子である薫は、自身について次のような悩みを抱える人物として描かれて

いる。

【引用7】

①幼心地にはの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおほつかなう思ひわたれど、問ふべき宮には、事のけしきにても知りけりと思されん、かたはらいたき筋なれば、世ともの心にかけて、「いかなりけることには。何の契りにて、かう③心安からぬ思そひたる身にしもなり出でん。善巧太子のわが身に問ひけん悟りをも得てしがな」とぞ独りごたれたまひける。

⑤おほつかな誰に問はましいかにしてはじめもはても知らぬわが身ぞ

答ふべき人もなし。④事にふれて、わが身につつがある心地するも、ただならずもの嘆かしくのみ思ひめぐらしつつ、宮もかく盛りの御容貌をやつしたまひて、何ばかりの御道心にてか、にはかにおもむきたまひけん、かく思はずなりける事の乱れにかならずうしと思しなるふしありけん、⑤ひとままさに漏れ出で知らじやは、なほつつむべき事の聞こえにより、我には気色を知らする人のなきなめり、と思ふ

〔源氏⑤ 匂兵部卿二三―二四〕

幼い頃にちらりと聞いた自身の出自への疑念は、傍線部②③④のよう薫のアイデンティティを揺るがし、薫の「おのづからおやすけたる心ざま」〔源氏⑤ 匂兵部卿三〇頁〕を形成している。またこの

ような不安から薫は、実際に出自が噂で広まるような描写はないにも拘わらず傍線部⑤のように思っており、彼の強いコンプレックスが読み取れよう。

一方『今とりかへばや』の宇治の若君には冷泉帝や薫のような葛藤は見られない。

【引用8】

①やうやうものの心知りたまふまに、いかになりたまひけんとおほつかなく、大納言（稿者注…宰相中将）も乳母も明け暮れ言ひ出でて恋ひ泣きたまふめれど行方も知らぬ人の御ことを見る目有様はいとうつくしう若くて、うち泣きていとあはれと思してのたまふが、もしこれやそれにもしたまふらんと思ひよるより、いみじくあはれなれど、②これはさやうなるべき人の御有様かは、行方なく人に思ひまがへられたまふべき人にもものしたまはずと、いとおやすけて思し続けられて、うちまめだちてものものたまはぬを

〔巻四五一二〕

これは今中宮と対面した若君が彼女を母親と認識した場面であり、ここではじめて母親に対する若君の心が語られる。傍線部①は『資料7』の「幼心地にはの聞きたまひしことの、をりをりいぶかしうおほつかなう思ひわたれど」と一見似ているようだが、薫が実際には源氏の子ではない自身のことを「おほつかな」く思っているのに対し、宇治の若君が「おほつかな」く思うのは失踪した母親の行方である。この違いは大きい。また、いざ母親とおほしき人物と対面した若君は「いとおやすけ」た態度で彼女の中宮という身分に配慮

し、即座にその秘密の共有者となっているが、この「おやすけ」た性質も、薫のそれは出生についてのコンプレックスに根ざす態度であるのに対し、若君の場合、そこに至るまでの経緯は一切描かれていない。母親と思われる人物に出会ったことだけは乳母に伝えるものの、それが誰であるのかは断固として明かさず、その様子は乳母から「幼き人ともなくいとうつくしいはけなからずものしたまふ」(巻四 五一九)と見られている。自分と母親との関係に「あはれ」を感じ涙を浮かべることはあっても、突然現れた母親が中宮であったことによる動揺や葛藤は、「おやすく」「いはけなからず」といった子どもらしからぬ大人びた態度によって覆い隠されてしまう。

『源氏物語』において〈不義〉の子の出自は秘匿されるべきものとして存在していた。それ故に抱えこまれた秘密が作中人物の葛藤となり、その内面世界が物語の一つのテーマとして展開していくのである。こうした『源氏物語』では、血脈を偽る子どもを家系上に置くことで、むしろ血脈を見据えていると言えるだろう。これに対し『今としかへばや』の〈不義〉の子の出自は基本的に隠されることはない。大姫君や大若君の血脈と家系の相違は問題に上がらず、物語末尾で彼等は平然と〈家〉の繁栄に組み込まれていく。唯一実の母親との再会の場面で用意される宇治の若君も、「いとおやすけ」た態度で納得し、自らの出自を共に秘匿していくことで、宰相中將の息子としてあり続けている。『今としかへばや』は、血の繋がらない子どもを家系上に置くことで、血脈に関わりなく〈家〉の子どもとして認めていることになる。

この物語には、密通により生まれた子どもにスポットライトを当てた後日譚は存在しない。故に、血脈を偽ることへの登場人物たち

の苦悩や屈折した思いが語られることはないが、それを血脈への関心の低さのあらわれでなく、「語らない」という選択により、血脈に〈家〉が優先されることを肯定しているとみるべきであろう。

注(1) 三田村雅子「いはでしのぶ物語」(『物語文学の系譜Ⅱ 鎌倉物語Ⅰ』

体系物語文学史四 有精堂 一九八九年)、深沢徹「恋路ゆかしき大將物語」(右に同じ)、助川幸逸郎「恋路ゆかしき大將」の主人公操作の方法「父系的」なものと〈双系的〉なもの(『年刊 日本の文学』三 有精堂 一九九五年)、足立蘭子(右に同じ)など。

(2) 神田龍身「鎌倉時代物語論序説―仮装、もしくは父子の物語―」(『日本文学』三五・一二号 一九八六年二月)のち「物語文学、その解体」(有精堂 一九九三年)第一部Ⅵ章に所収、「物語史への一視角―『古』としかへばや』『在明の別』と『今としかへばや』―」(『文学・語学』一〇一号 一九八四年四月)。

(3) 西本寮子「家」の物語の時代」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版二〇〇二年)

(4) 拙稿『今としかへばや』の〈家〉への志向―親子間の〈愛情〉描写から―(『国文目白』五〇号 二〇一二年二月)

(5) 拙稿「〈家の物語〉としてみる『今としかへばや』―「世づかぬ」異性装」(『国文目白』五一号 二〇一二年二月)

(6) 阿部秋生ほか校注・訳『源氏物語』①⑥(新編日本古典文学全集20-25 小学館 一九九四年)

(7) 池田利夫校注・訳『浜松中納言物語』(新編日本古典文学全集27 小学館 二〇〇一年)

(8) 「梨原にのみなりゆく御心」とは「君ばかりおぼゆるものは梨原の駅屋出でこんたぐひなきかな」(夫木和歌抄・雑一三・読人知らず)から

の引き歌表現であり、類ない愛情をいう。

- (9) 物語のはじめに「右大臣殿の女御やんごとなくてさぶらひたまふめれど、一の人の御むすめならねば、后にもえ居たまはず」(巻一一七九頁)とある。

- (10) 前掲西本(5)論文。

- (11) 養子の認定は倉田実「真木柱と紅梅大納言の子どもたち―実子・養女・継女」(『古代文学研究』第二次一一号二〇〇六年一〇月)の説によった。

(付記) 本文として石埜敬子校注・訳『住吉物語・とりかへばや物語』(新編日本古典文学全集39小学館二〇〇二年)を使用し、引用の傍線は私に付した。

受贈雑誌(三)

| | |
|---------------|-------------------|
| 神女大国文 | 神戸女子大学国文学会 |
| 高知大国文 | 高知大学人文学部国語学国文学研究室 |
| 稿本近代文学 | 筑波大学国語国文学会 |
| 語学文学 | 北海道教育大学語学文学会 |
| 國學院雜誌 | 國學院大學 |
| 国語学研究 | 東北大学文学部国語学刊行会 |
| 国語国文学研究 | 熊本大学文学部国語国文学会 |
| 国語国文学報 | 愛知教育大学国語国文学研究室 |
| 國語國文研究 | 北海道大学国文学会 |
| 国語国文論集 | 安田女子大学日本文学科 |
| 国語と教育 | 大阪教育大学国語教育学会 |
| 国語と教育 | 長崎大学国語国文学会 |
| 國際日本文学研究集会会議録 | 国文学研究資料館 |
| 国文学 | 関西大学国文学会 |
| 国文学研究 | 早稲田大学国文学会 |
| 国文学研究資料館紀要 | 国文学研究資料館 |
| 国文学研究ノート | 神戸大学研究ノートの会 |
| 国文学攷 | 広島大学国語国文学会 |
| 国文学試論 | 大正大学大学院文学研究科 |
| 国文学踏査 | 大正大学国文学会 |